

初めて植物に学名を与えた日本人 伊藤篤太郎

Tokutaro Ito, A Japanese who gave a scientific name for plants for the first time

岩津 都希雄 (IWATSU Tokio)

伊藤圭介は江戸時代後期から明治時代前中期にかけて活躍した尾張名古屋出身の本草学者、植物学者で、その名は地元名古屋を中心によく知られている。一方、その孫の伊藤篤太郎となると、これまで「伊藤圭介の孫」としての肩書きに甘んじ続けていたのが正直の所であり、偉大なお祖父さんの陰に隠れ、盛んな圭介研究と比べてあまり研究対象にされて来なかったのは事実である。しかしながら、篤太郎が日本の植物学史や博物学史に残した足跡は決して小さくはない。

本稿では、篤太郎が残したこれらの業績を紹介しつつ、篤太郎がどのような研究者人生を歩んだかということを中心に述べてみたい。なお、詳しくは拙著『伊藤篤太郎—初めて植物に学名を与えた日本人—(改

訂増補版』をご覧ください。

篤太郎は、圭介の五女小春と養子の医師延吉（旧姓中野）との間の長男として、慶応元年11月29日（西暦1866年1月15日）に名古屋七間町に生まれた。この生家と隣町の呉服町にあった圭介宅とは目と鼻の先であり、圭介は初孫となる篤太郎とは日々のように接し、目の中に入れても痛くない程の可愛がりようだったとされている。

元来、圭介の子供達は男も女も若くして亡くなる者が多く、また存命した末っ子は傍らにいて自分の面倒を見てくれる孝行息子であったものの、学問を継ぐ気がないようで、後継者問題で圭介を悩ませていたのであった。そこで、圭介の後継者としての期待の矛先が次第に篤太郎に向けられるようになった。

しかしながら、少年時代の篤太郎は学校に行きたがらない子供、現代でいう不登校児であった。

東京本郷の湯島小学校を皮切りに、名古屋の愛知英語学校や東京大学医学部予科など、行く学校の先々で入学と中退を繰り返していた。相次ぐ挫折で失意に沈む孫を不憫に思ったのか、圭介は13歳になった篤太郎を東京に居させて、手許を離さず自ら本格的な教育をすることにした。当時、圭介は東京大学理学部員外教授として小石川植物園にて植物を調べる役職に就いていた関係上、小石川植物園が学校となり、圭介が教師となったのであった。こうして、篤太郎は数年間、植物学を中心にして博物学を祖父から学んだ。

こういった圭介のある意味偏った教育に対して、その高弟である田中芳男による批判もあったが、篤太郎の成長を促したことも事実であった。また、ロシアの植物学者であるマキシモヴィッチやアルゼンチンの菌学者であるスペガツィーニなどのような海外の著名な学者との間において、篤太郎は書簡や標本の交換を行い、学術的交流を成し得たことが自信にもなった。

そうこうしているうちに、篤太郎の海外留学の話が持ち上がってきた。

篤太郎は明治17年（1884）3月に英国へ向け研究留学に出発した。英国では結局3年半程滞在したのであるが、前半はケンブリッジ大学でヴァインズやフランシス・ダーウィン（進化論で有名なチャールズ・ダーウィンの息子）らの指導の下に植物生理学と植物解剖学の研究をし、後半はキュー王立植物園でジョセフ・フッカー、チセルトン・ダイア、オリヴァーおよびヘムズレーらの協力の下に植物分類学の研鑽を積んだ。

この留学時代に書き上げた論文は共著者を含めると6編以上になった。この中にはネイチャー誌への投稿論文「琉球諸島の植物」も含まれていて、同誌における日本人としての最初の投稿者となったのであった。また、これが後の明治32年（1899）になって、同誌の30周年記念号における特別寄稿家として、日本人では南方熊楠とともに篤太郎が選ばれることに繋がった。

篤太郎には留学前から気になっていた植物が幾つかあった。いずれも未記載種の可能性が高いと考えられていたものであった。以前ならいずれかの外国の植物学者に鑑定をお願いし、それと引き換えに研究の主導権を握られ、新種命名の榮譽を鳶に油揚をさらわれるように逃がすのが常となっていた。日本の植物学者の名誉にかけても、日本人によって学名をつけ、そしてその最初の新種命名の榮譽はぜひ我が伊藤家から出したいと、篤太郎は決意を胸に秘めていたと思われる。それらの植物の中に、叔父の謙が明治8年（1875）8月に戸隠で採集したトガクシソウ（トガクシショウマ）があり、また大伯父の大河内存真が名古屋鍛冶屋町の自宅の庭の塀近くに植栽していた紀伊国熊野産のキイセンニンソウがあった。

明治16年（1883）の7月に二回にわたりマキシモヴィッチ宛に、これら二種の新種提案を記した書簡とその標本などが送られた。

そこで、マキシモヴィッチは鑑定の結果、篤太郎の新種提案を受け入れることにし、明治19年（1886）2月にロシアの学術誌であるサンクト・ペテルブルグ帝国科学院生物学会雑誌に、この二種が新種と

して記載された論文を発表した。その中でトガクシソウは *Podophyllum japonicum* Ito ex Maxim. として、またキイセンニンソウは *Clematis ovatifolia* Ito ex Maxim. として、両者とも「マキシモヴィッチが自分の論文の中で篤太郎の代わりに発表した」というただし書きの「ex Maxim.」が付くものの、日本人による初めての新種としての学名の命名がなされたのであった。

よく図鑑などで、ヤマトグサ (*Theligonum japonicum* Okubo et Makino) が明治20年(1887)に牧野富太郎によって日本人として初めて学名が付けられた植物として載っているが、実はこの記載自体にそもそも誤りがあり、論文発表の年は明治20年ではなく明治22年(1889)であり、命名者も牧野富太郎単独ではなく、大久保三郎(さむろう)と牧野との連名であった。いずれにしても、発表の年については、篤太郎の方は明治19年で、こちらの方が明らかに早いのである。つまり、牧野富太郎が日本人として初めて学名をつけたというこのような記載は誤りになるかと思われる。

次に、マキシモヴィッチが1867年に新種として発表した *Achlys japonica* Maxim. は本邦の東北地方北部と北海道に特産するものであるが、北アメリカ西部に分布する既知種の *Achlys triphylla* DC. に比較して、茎も葉も小形であるものの他の形質は類似するとして、篤太郎は独立種よりもむしろ同種の変種として位置付けるべきとした。そこで明治20年(1887)3月に、*Achlys triphylla* DC. var. *japonica* (Maxim.) T.Ito という変種への格下げ提案を自らの作図を添えて行い、その和名を産地の南部地方に因んでナンブソウと名付けた。そして、この発表が日本人による初めての新変種名提案となったのであった。

さらに篤太郎は留学中に、ユキワリイチゲをマキシモヴィッチ宛に新種提案し、学名を圭介に因んだ *Anemone keiskeana* T. Ito ex Maxim. とした。そして先のトガクシソウとキイセンニンソウと同様なステップを踏んで、日本人によるものとしては3番目となる新種としての学名の命名が篤太郎によってなされた。論文の掲載は帰国後の明治21年(1888)8月になった。

さらに同年10月には、先に新種として学名を命名したトガクシソウに対して、新属 *Ranzania* を創設してこれに移し、新組み合わせ *Ranzania japonica* (T.Ito ex Maxim.) T.Ito を記載した。この発表は日本人として初めての新属としての学名の命名となるものであった。

以上のように、篤太郎は次々と画期的な仕事をし、植物分類学者として順調なすべり出しをして、将来を嘱望されていた。

ところが、このトガクシソウの帰属に関する新属創設の優先権争いで、帝国大学植物学教室の矢田部良吉教授の怒りを買って、教室の出入り禁止という、いわゆる「破門草事件」を起こしてしまった。またそればかりではなく、ケンブリッジ大学やキュー王立植物園への研究留学という実績はあるものの、国内での実質的な学歴がない篤太郎にとって、帝国大学を中心とした学閥の壁は厚く、公的な機関での研究職になかなか就けなかった。

こうしたこともあり、「破門草事件」以後の篤太郎の人生は不遇であったと従来から評価されてきた。

それでも何とか明治23年(1890)に地元名古屋において、愛知県尋常中学校教諭という職を見付け、明治25年(1892)7月には圭介の九十賀寿を名古屋市門前町愛知博物館で開催し、圭介の後継者であることを世に周知させた。

篤太郎は明治27年(1894)になり、鹿児島高等中学造士館へ教職の場を移し、教師としての夏の長期休暇を利用して奄美や琉球に植物採集を行った。それが基礎となって暖地性の植物を研究することになり、これが東京帝国大学の松村仁三教授との共著論文「琉球植物志」を発表することに繋がった。

また、松村教授と著作を共にしたということで、同大学での破門はどうやら解除されることになり、その後、それら暖地性の植物の植物地理学的研究により同大学から理学博士が与えられた。

その一方、篤太郎は初学者向けの教科書である『最新植物学教科書』を著わし、また日本初となる本格的百科辞典である『日本百科大辞典』の植物の項目の多くを執筆し、さらには色彩が美しくまた精密

なる写生図・解剖図を備えた植物図譜である『大日本植物図彙』を上梓したりして、多彩な著作活動を行っていた。

長らく定職に就いていなかった篤太郎であったが、大正10年(1921)になり、東北帝国大学理科大学生物学科の講師に就任した。この就任時に篤太郎は56歳になっていた。主任の畑井新喜司教授より10歳年上の講師であった。それでも篤太郎にとっては念願の官職であった。それも帝国大学の研究職である。講義や実習に多少の時間がさかれるものの、研究に没頭する時間と場所を得たのであった。ただ、この生物学科は新設のため、文献・図書はまだ揃っておらず、また植物の標本類は無いにも等しかった。つまり、研究環境としては十分とはいえなかった。そして篤太郎は、昭和3年(1928)3月、東北帝国大学を講師の身分のまま定年退官することになった。

篤太郎は、元来、植物学者であったが、顕花植物以外の生物を対象とした研究にもかなりの業績を残している。

篤太郎は昆虫一般に造詣が深かったのであるが、特にアリの分類学的研究では、*Camponotus nawai* Ito (ナワヨツボシオオアリ) など数種類の新種を発表している。

また藻類にもかなりの興味を示していた。その中でも本邦の南西諸島特産の海藻であるカサノリ (*Acetabularia ryukyensis* Okamura et Yamada) については、その美しさに魅了された植物学者の一人として、欧文での論文を執筆している。

篤太郎はキノコやカビなどの菌類にも研究領域を広げていて、中でもナメコを *Collybia nameko* T. Ito との学名の下に、新種として発表したことがあった。

篤太郎は妻京子との間に息子5人、娘2人、計7人の子供を儲けた。特に長男の圭彦には自分の後継者としての期待があり、採集に連れ回していたようであった。しかしながら、圭彦は学者としての道を選ばず、昭、光彦といった子供も二人できて、人生これからという時に肉腫に罹患してしまい、激痛と戦いながらも34歳という若さで亡くなってしまった。また、ほかの子供達も植物学の研究とは無関係な世界に巣立っていった。結局は篤太郎の跡を継ぐ子供達はいなかったのである。そして、官職に長らく就くことができなかった篤太郎にとって、身内以外の弟子もできにくかったのはしかたがないことであった。

そこで、篤太郎は初孫の昭氏に期待をかけ始めた。子供に後継者がなく、初孫にその期待をかけたという祖父圭介に重なる姿であった。

しかしながら、祖父ほど長生きをしなかった篤太郎はその夢を現実することなく、昭和16年(1941)年3月21日に脳内出血で亡くなってしまった。76歳であった。

お墓はソメイヨシノの名の由来になった東京染井に立地する東京都立染井霊園にある。

引用文献

岩津都希雄(2016)『伊藤篤太郎—初めて植物に学名を与えた日本人—』(改訂増補版)。八坂書房、東京。